

詐騎士外伝 薬草魔女のレシピ 2

登場人物紹介 Main Characters

◀ カルパ

エルファの雇い主。
食べ物を美味しくする
魔力持ち。

▲ エーメルアデア

ギルネストの母で
国王の第二夫人。

エルファ(16歳) ▶

婚約破棄を機に、都で
料理人になった“薬草魔女”。
最近は街の人々の健康相談に
乗ることもしばしば。

エノーラ▲

ゼルバ商会を仕切る
やり手の女経営者。

セルマ▲

国王の正妃。現在
あるストレスに
悩まされており…

▲ ナジカ(16歳)

ランネル王国の警察機関、
緑鎖に所属する少年。
人や物を操る傀儡術の使い手。
エルファに求愛している。

▲ ルゼ

有名な女聖騎士。
都の女性達の
憧れの存在。

▲ ギルネスト

ルゼの夫で、
ランネルの第四王子。

▲ リゼ

ルゼとギルネストの娘。
おませな5歳児。

▲ ジオスグライト

ペンギンに見えるが、
川猫獣族という獣族の一種。

第一話 フレーメの農園

初夏の風が心地よい。少し動けば汗ばむ陽気は、この国の夏の暑さを予感させる。

庭のハーブに水やりを終えたエルファは、帽子を深く被り直した。

「今日はお出かけ日和でよかったわ。けど、日に焼けないようにしなきゃ」

実家はグラーゼ王国にある片田舎で比較的高地にあつたせいかな、さほど暖かくはなかった。

一方、今エルファがいるランネル王国の都、ルクラスは故郷より南、しかも平地に位置するため、気候は温暖だ。

が、南北に長いこの国の北部には険しい山があり、それを越えるとグラーゼにも負けないぐらい冬の寒さが厳しいという。それでいて半島になっている南部は中央部にある都よりさらに暖かく、冬でも雪が降らないらしい。

そんな風に気候に大きな違いがあるおかげで、この国の食材は実に多種多様だ。小麦はもちろんだ。寒冷な北部で育つ野菜や、温暖な南部に育つ果物類。大陸の東端に位置するこの国では、海の幸も容易に手に入る。ルクラスの都は、それらの食材が集まる場所であった。

そのため都はいつも、美食を求める人々で溢れ、名店と呼ばれるレストランも数多く並んでいる。

中でも最近評判なのが、フレームという茶間屋が経営する、『レストラン・ラフア』だ。メニューを考案しているのが『薬草魔女』であることを売りにしており、系列店である『ティールム・フレーム』とともに、毎日多くの客で溢れている。その薬草魔女こそがエルファであった。

薬草魔女というのは、グラーゼ王国発祥の職業で、食べ物薬効を考慮した料理を作り、人々を健康に導くことを理念としている。美食だけを追求すれば身体に害が出ることもあるが、薬効などの知識をもって料理をすれば、美食と健康は両立するというわけだ。

師である曾祖母のもとで修業を積んだエルファは、元々故郷で独立して働く予定だった。が、色々あってフレームの仕入れ人であるクライトに料理人としてスカウトされ、この国に来たのだった。

「さて、何か忘れてないかしら」

料理用のハーブが植えられ、お客様の目を楽しませる効果もある小さな庭を見回す。まだ小さな林檎の木は可愛らしくてエルファも好きだ。この枝に赤い果実がたわわに実るのはまだずっと先のことだろう。このラフアで働いてしばらく経つが、今も一日一日が新鮮で楽しくて仕方がない。

「エルファ、用意できた？」

「あ、はい。ちょうど水やりも終わったところです」

二階から声をかけられて、エルファは如雨露を物置に戻す。庭の手入れは、ハーブの専門家であるエルファの役目だ。

「女の子の支度は長いものだけど、普通は髪セットとか化粧とかで長いものなのね」

と、二階の窓枠に頬杖をついて笑っているのは、この店の若き料理長、ゼノンだ。のんびりとし

た見た目と性格だが、仕事の速さと正確さではエルファはとても敵わない。包丁を持たせれば計ったように均等に食材を切るし、盛りつければどの皿にも決められた量を正確に載せていく。独創性はあまりないが、安定した味を提供する、という点においては、他の料理人の追隨を許さない。

「仕事で農園へ行くのに、格好で気張ってどうするんですか。必要な荷物は昨日まとめて、鞆の中に入れてましたよ。完璧です」

「そうだけど、それでも気張るのが女の子だからさ。ま、面倒臭くなくていいけど。そろそろナジカが来る頃だし、切りをつけた方がいいよ。ナジカは時間に正確だから」

「時間に正確？」

「かなり正確な体内時計を持つてるな」

「腹時計でしょう、それ」

これから合流する友人へ対するおかしな表現に、エルファは思わず笑った。

「それじゃ私もう行きます」

「ああ。今日は俺が留守番してるから、戸締まりとかは気にしなくていいからね」

「はい」

エルファは厨房に置いた荷物を手に取ると、門の外にいる馬車へと走った。

今日はレストランもティールムも休みだ。その休みを利用して、茶間屋フレームの代表であるカルパ自ら、郊外にあるフレーム所有の農園を案内してくれる予定なのだ。

仕入れの時にも使われる幌馬車には、予想以上に多くの荷物が積んであった。これらはすべて農園で働く従業員への土産らしい。エルファはその中の木箱に腰を下ろし、馬車の揺れに身を任せていた。明日の早朝には、この馬車にたつぷりの食材や加工品を積んで戻るのだ。

「今日は晴れてよかったな。ハニーも喜んでる」

ナジカは馬車の脇で愛馬の背に揺られながら言う。ハニーとは彼の愛馬だ。名前の由来は蜂蜜みたいな色だったからだという。

今回、エルファを農園に案内したらどうかと言ってくれたのは、このナジカである。

いつも腹ぺこで、食べるのが好きで、特にお菓子を愛する十六歳の彼は、仕事以外の人生をほとんど食べ物のために費やしている。その食いしん坊ぶりは呆れを通り越して感心してしまうほどだ。警察機関である緑鎖に所属し、フレーメの従業員達とは子供の頃から親しくしているらしい。

そしてエルファはその彼に、手作りの菓子を手ずから食べさせたという理由で、一目惚れならぬ一口惚れされてしまった。以来ずっと口説かれていたのだが、今はお友達としてお付き合いしている。エルファは彼が嫌いなわけではない。派手な装身具をたくさん身につけ、ややチャラそうな雰囲気があるとはいえ、顔立ちは整っているし、職業もしっかりしている。普通に考えればお付き合いする相手として問題ないのだろう。

だが、エルファがクライトのスカウトを受け、遠路はるばるこの国にやってきたのは、婚約者に浮気されて結婚が破談になったからだ。まだそのショックから完全に立ち直っていないのに、口説かれたからさあ次の恋を、と割り切れるほどエルファは器用ではない。

一方、お友達宣言されたナジカは、まったく落ち込むことなく、「お友達」として休みのたびに店にやってくる。仕事の休みもフレーメに合わせたらしくて、こうしてよくエルファを連れ出してくれるのだ。親切には感謝しているが、複雑な心境だ。

そのナジカであるが、現在、やや崩し気味の私服を着て、大きなスカarfを巻き、すつと通った鼻筋や形の良い口元を隠している。以前はチャラチャラしているという印象だったが、最近ちょっとその印象が変わってきたことにエルファは気付いた。

「ナジカ、一つだけ忠告しておくが、その格好で夜歩いたら完全に強盗だからな」

「えっ!？」

御者ごしやをしている仕入れ担当のクライトが言うと、ナジカは驚いて声を上げた。

そう、チャライ上に、なんだか犯罪者っぽいのだ。

「どこがっ!？」

「鏡を見る」

クライトはやれやれと首を横に振った。

ナジカの服装に関する感覚は、少しばかり周りとズれているらしい。装身具は、実は魔導具まどうぐのことなので仕方ないのだろうが、その崩れた格好で口元を隠していると、本当に怪しい。

実はスカarfは、彼がこの春から悩まされている枯草熱こそうねつ——牧草などの花粉によって風邪を引いた時のような症状が出る病——を抑えるための物なのだが、それを知っていても怪しく見える。

「そんな。イケてるって言われたのに」

「ベナンドさんの言葉を信じるな」

クライトがナジカの上司の名を出して叱りつける。彼も格好よく緑鎖りよんの制服を着崩していることが多いので、部下に近い趣味をしているのだろう。

「ベナンドさんじゃない、近所の子だよ」

「どうせベナンドさんみたいな奴だろ」

そういえばナジカは近所の不良っぽい少年と、服装の件で意気投合していたことがある。ああいったことは日常茶飯事なのだろう。類は友を呼ぶと言うから。

ナジカは何かぶつぶつ言っているが、スカーフでくぐもってよく聞かえない。

「今に始まったことじゃないから、エルファも気にしなくていい。そういう突っ込みはクライトやゼノンに任せとけばいいんだ」

どう反応すべきかと迷うエルファに、一緒に馬車に乗っていたカルパが呆れ顔で言った。ちなみにゼノンは明日の仕込みのために店に残っている。日帰りするには厳しい距離なのだ。

クライトはのんびりと景色を眺めながら言う。

「だけども、もし私服が原因で出世できないとかなったら笑うしかないな」

「はは。さすがに、私服が原因でつてことはないだろ。全裸で街中歩いたとかならともかく。ああでも、本当に強盗と間違えられて問題を起すとかはありそうだな」

普段は経営者らしく落ち着きのあるカルパが、腹を抱えて格拉格拉と笑う。

彼は他の従業員がいまいせいか、普段よりも肩の力を抜いているようだ。いつもはかつちりした

スーツ姿だが、今日はシンプルなシャツ一枚とズボンである。それでも不思議と育ちが良さそうに見えるのは、整った顔立ちと姿勢の良さ、そしてどこか品のある振る舞いゆえだろう。彼やフレームの仲間達は、財産を遺してくれたフレームという老紳士にマナーや教養をひと通り仕込まれたらしい。茶間屋ちまなやティールームの名はその老紳士からもらったのだという。

ちなみに『ラファ』は、エルファの名前であるエルファ・ラファ・レーネが元になっている。

エルファはこの名を、ご先祖様の聖女ラファルタより継いだのだ。

「エルファ、うちの畑はもうすぐだ」

カルパが声をかけてくる。馬車の中から見渡せば、豊かな農園風景が広がっていた。

この辺りでは穀物ではなく、都で消費される日持ちしない野菜などが育てられているらしい。

「管理人をしている老夫婦はその畑の元々の持ち主で、俺達のじいさんの友人だったんだ」

俺達のじいさん——つまりフレームという老人の伝手てなのだ。

「元々つてことは、そのご夫婦からカルパさんが土地を売ってもらったということですか？」

「ああ。その息子夫婦は畑には興味がなく、老夫婦が言うには、自分達が死んだ後に売られるぐらいなら、今安く売ってやるつて。その代わり管理は自分達に任せて従業員達はこつちの指示に従えつてさ。うちの従業員は畑のことは何も知らないガキばつかったから、使い物になるようにしてくれてありがたいよ」

「元気なご老人のお知り合いが多いんですね」

「元気すぎて周りは大変みたいだけどな。ま、このままずっと元気でもらわないと」

カルパは風で乱れた髪を整えながら笑みを浮かべた。

「そうですね」

お年寄りが生きがいを持って元気に暮らせるというのは素晴らしい。

グラーゼで薬草魔女をしている曾祖母を思い出して、少し故郷が恋しくなる。手紙が往復するのにも数週間かかる距離だし、届かないことだって多い。前にもらった手紙には、新しい弟子が出来るそうだと書いてあったが、どうなっただろうか。

妹弟子はどんな子で、何を贈ったら喜ぶだろうかと考える。この国のガラス製品はとても素敵だし実用的だが、割れ物は危険だ。それなら食べ物贈りたいところだが、日持ちして珍しい食べ物というのもあまりない。

「どうした？」

「いえ、妹弟子に送るのに、うちの商品以外で日持ちして壊れない、気の利いた物はないかと」

カルパは、食材の味を良くする不思議な魔力の持ち主だ。その魔力が染み込んで美味しくなってお茶が、フレーメの売りの一つである。ティールームで出すクッキーなどのお菓子も、確かな舌を持つ従業員によって作られ、安定の美味しさを誇っているので評判はいい。が、それらは既に、前回手紙と一緒に送ったのだ。もう妹弟子の口に入っている可能性がある。

「そりゃあ難しいな。大抵どれかに引っかかるしな」

カルパはまたグラーゼと笑った。

「うちの知り合いのじいさん達は食道楽が多いし、『フレーメ』の商品を送れば満足してくれるか

ら楽だけだな」

「薬草魔女も大体そうなので、結局うちの商品しか思い付かないですよね」

「喜ぶんならいいだろ」

「姉弟子からの荷物は見習い弟子の唯一の楽しみなんですよ。いつも似たり寄ったりだと、ねえ」

贈る物によって、姉弟子に対する印象はがらりと変わる。エルファも姉弟子は何人かいるが、一番好きだったのは、いつも違う種類の可愛らしいお菓子を手紙に添えていた姉弟子だ。そんな風に楽しみにしてくれていると思えば誇らしい気持ちになれる。

妹弟子に素敵なお菓子だと思われたという見栄が、エルファの心の中で渦巻いている。

それを簡単に説明すると、聞いていた男達はまた笑った。

「女ってそういうの気にするよな」

「エルファちゃんも、そんな女の子同士の見栄の張り合いするんだ」

「そりゃあしますよ！」

そう言ってクライトの背を軽く睨む。

「じゃあ、うちの商品の中でも特別な贈答品用のやつを送ったらどうだ？」

「贈答品用？」

「ゼルバ商会で、綺麗な食器とセットで高級品として売ってもらってるやつさ。直接送ってほしいと頼めば、割れ物でも大切に運んでくれる。見栄を張られて、実用的だ。エルファなら代金負けてもらえるだろうしな。夏の新作ですって一言添えて送れば、若い子は目を輝かせて喜ぶだろ」

「へえ、それはいいですね」

『ラファ』の出資者であり、内装から食器まで選んでくれたゼルバ商会の会長の娘、エノーラを思い出す。彼女のきらびやかな店で扱っているなら、食べるのがもったいないぐらい素敵な物に違いない。

「今度、エノーラさんに相談してみます」

「ああ。そういう見栄張りが大好きな人だから、きつといい提案をしてくれるさ。おっと、もうすぐ到着するぜ」

クライトが振り返る。彼の指さした先には、扉に囲まれた大きな屋敷があった。

屋敷の持ち主である老夫婦はエルファ達の馬車がやってくると、喜んで門の中に迎え入れてくれた。二人ともいかにも人が良さそうな風貌だった。それに、高齢のわりに背中はずぶ伸び、足取りもしつかりしていて、若々しく健勝な印象である。

「こんにちは、ジョズじいさん、ミゼルばあさん」

馬車から降りたクライトが真っ先に走り寄って、夫人を抱擁した。

「まあまあ、よく来たわねえ。相変わらずいい男なこと」

「ミゼルばあさんは相変わらず若々しいな。出会った頃とちつとも変わらねえ」

相変わらずクライトは調子のいいことを言う。しかしこれが彼の魅力だ。旅と美食が趣味だという彼は、仕入れに行く先々で生産者と親しく交流しながら商売をしているらしい。

次にカルパが同じように挨拶して、ナジカも軽く会釈をした。

「カルパまで来るなんて、珍しいわねえ。狙われるからって、あまり遠出ししないのに」

カルパは大きな店の経営者で、しかも物の味を良くする能力を持っているため、得体の知れない連中によく狙われるのだそうだ。

「護衛としてナジカが付いてきてくれたからさ。それに今日は、葉草魔女を連れてきたんだ」

「そちらのお嬢さんね。噂通り、可愛らしいわねえ」

夫人が近づいてきたので、軽く抱き合う。彼女からは、果実のような甘い香りがした。

「初めまして、葉草魔女のエルファ・ラファ・レーネです」

一歩離れてエルファは自己紹介をした。

「今日は畑を見せてもらいに来ました。よろしくお願ひいたします」

「畑以外に何もありませんが、どうぞご覧ください。あと、うちの若い女の子が、相談があるみたいだから、後でよろしくお願ひできるかしら」

「もちろん、喜んで」

そういった子がいるというのは、前もってカルパから聞いていた。だから女性にありがちな悩みに効く薬草をいくつか持ってきている。大抵のことには対応できるはずだ。

朗らかにエルファ達と言葉を交わすミゼルに対し、夫のジョズは寡黙な質なのか、無言で馬車をどこかに連れていった。ナジカの馬も、それに勝手についていく。

「……ナジカさんの馬、ずいぶん懐いているんですね」

「そりゃ、育てたのがジョズじいさんだからな」
「ああ、それで」

動物は素直だ。馬にとつてはナジカよりも彼の方が上なのだろう。

「さて、見学は少し休憩してからにするか？」

カルパの問いに、エルファは首を横に振った。

「私は座っていただけです、いつでも構いませんよ」

「んじゃあ、案内ついでに農園の従業員を紹介していくな。ミゼルばあさん、エルファは勝手に俺が案内しておくからさ、今夜は何か美味しい物作ってくれよお」

クライトのおどけながらの懇願に、ミゼルは笑って答える。

「分かりましたよ。そう言われると思つて、ちゃんと仕込んであるよ」

「そりゃあ楽しみだ」

この中で最も舌が肥えているクライトが楽しみにするのだから、エルファも楽しみでならなかった。ナジカも今夜のごちそうを想像したのか、すっかり腑抜けた顔をしている。

「じゃあ行ってくる」

「行つてらっしゃい」

ミゼルは首筋を左手で掻きつつ、右手を振る。

エルファはそんな彼女をわずかに振り返り、クライト達の後に続いた。

この農園は、フレームの系列店で使う野菜やハーブ、果物を扱っている。畑で作物を育てるだけでなく、屋敷の裏には他所から仕入れた茶葉や果物などを加工する作業場もあるそうだ。そうして出来た物を店で出したり、お菓子に使ったりするらしい。

畑にはローズマリーにバジル、レモンバーム他、様々なハーブが茂っていた。隅には虫除けのワームウッドも植えられている。とても苦いが甘い香りがするため、リキュールの香り付けにも使われるハーブだ。

「あ、カルパさん」

何か撒いていた麦藁帽子の男性が、ふと顔を上げて手を振った。クライトよりも大柄で、ずいぶん日に焼けている。顔には傷があり、街中で見たら思わず避けてしまふような風貌の男性だった。

「何してるんだ？」

「ああ、虫除けの液を撒いてます。その子が、新しい料理人の子ですか？」

「ああ、そうだ。エルファだ。顔を覚えてくれ。覚えられるよな？」

「まあ、たぶん？」

彼は草刈り用の鎌を片手に、自信がなさそうに首を傾げた。

「努力はしてくれ。エルファ、あれはグローク。この農園の従業員の代表。顔は怖いし、口は軽いし、マジで人の顔覚ええないけど、土いじりは得意なんだ。だから忘れられても気にしないでくれ」
クライトが念を押しつつ紹介する。よほど人の顔を覚えられないのだろう。次来た時に忘れられていても、気にしないように心がけようと思つた。

「これからよろしくお願いします。エルファです。素晴らしい畑ですね」
「だろお」

畑を褒めると、彼はでれつと笑った。子供に怯えられるような顔をしているのだが、笑うと印象が変わる。顔はともかく、人は良さそうに見えた。

「でも、畝のところに雑草が生えてるぞ」

カルパが畑を覗き込んで言う。エルファはくすりと笑って口を挟んだ。

「カルパさん、雑草という名の植物はありません。これはわざとですよ。作物が虫や病気に強くなるよう寄せ植えしてるんです」

「寄せ植え？」

カルパは、畑に関してはグロゲ達に任せっきりらしい。

「共生栽培って言って、相性の良い植物を配置を考えながら植えるんです。一緒に植えると病気になるにくくなったり、育ちが良くなったりするんですよ。作物にもよりますが、他にも、虫除けの効果がある植物を間に植える場合があります。例えばヒマワリで畑を囲むと、外から来る虫を引きつけてくれるのだとか」

「へえ」

カルパが感心したように頷いた。

「そうなんだ。畝のやつは育ちを良くするハーブ。ちなみに、これはニームの葉を煮出して作った虫除け。うちの商品、高級品として扱われがちだから虫食いとかなには気を使ってるんだ」

グロゲは撒いている液についても教えてくれた。

この農園には、薬草魔女が口を挟む余地は特にない。美味しい物を作る製造者を支えるのは、それに相応しい作物を作る生産者ということだろう。

「へえ。そんなのがあるんだな」

「この持ち主のカルパさんが感心してどうするんだよ」

グロゲは呆れたように言った。

「俺の持ち物じゃなくて、みんなの物だろ。俺は代表者なだけで、お前もうちの幹部の一人だつてこと、忘れてるだろ」

フレームの幹部と呼ばれているのは、フレーム氏に仕込まれて彼の遺産を相続し、最初に茶間屋『フレーム』を立ち上げた人達だ。

「だいたい、畑についてそんな細かいこと教えられたのは初めてなんだが」

「そりゃあ、カルパさんは穫れた作物にしか興味ねえから、話したことねえもん。クライトさんならともかくさ」

「べ、別に興味がないわけじゃ……」

カルパは動揺を見せた。その様子を見て、クライトとナジカが腹を抱えて笑う。

「俺はまだこの作業が終わってないんで、また後で。これ以外の農作業はほとんど朝に片付けてるから、他の奴らはみんな作業場ですよ」

収穫は朝にするものだ。特に夏なら、収穫以外の作業も涼いうちに済ませてしまおうのが望ましい。

「じゃあ、頑張ってくれ。土産に菓子とか持ってきたから。エルファが作った新商品だ」
「おお」

グロークは目を輝かせた。熊みたいな図体をしているが、フレームの従業員らしく、菓子が好き
なようだ。何故かナジカまで一緒に目を輝かせている。彼は店でちゃっかり試食済みなのに。

「今日のは余り物じゃなくて、お前らのために作ってくれた物だぜ」

「え、マジですか。珍しいこともあるもんだ」

がははと笑うグロークに手を振って、奥の畑に移動した。

この農園には、フレーム用のハーブ園の他、果樹園に自家用の畑、牧場もあるようだ。

果樹は柑橘類と林檎とプラムが植えられていた。これは昔からある木だそうだ。この木の花を
使って、養蜂もしているという。フレームの系列店では、料理によって数種類の蜂蜜を使い分けて
いるが、この蜂蜜も使っているらしい。

以前蜜蝋を購入しようとした時に、ここで作られた蜜蝋を分けてもらったことがある。普段は蝋
燭の材料にしているそうだが、蜜蝋は肌の保湿にもいいので、エルファはそれでクリームを作った。
牧場ではナジカの馬が仲間達と走っていた。馬の他に山羊などもいる。

「馬を育てるのはじいさんの趣味なんだ。さすがにナジカの馬みたいなのは他にいないけどな」

「特別な子なんですか？」

「ナジカ、傀儡術師たる。あいつの場合それを応用して、遠く離れた相手でも心で呼びかけて連絡

を取ったりできるんだ。同じようにして動物の心に呼びかけて、命令を聞かせやすくしてるらしい。
それでハニーは他の馬よりも賢くなったんだ」

「へえ」

傀儡術とは、その名の通り、人や物を操る術の総称である。ナジカとゼノン、手を触れずに物
を動かすことが出来るとは聞いていたが、そんなことも可能なのか。

エルファは感心して、馬を眺めるナジカを見た。彼は愛おしげな顔をしている。そしてスカーフ
の下でげげほと咳き込んでいた。

本来なら枯草熱持ちの彼は、牧草のある牧場に近寄るべきではない。今も辛はずなのだが、そ
れを忘れたかのように愛情のこもった穏やかな目をしていた。

「ナジカさん、本当に馬が好きなんですね。自分から牧草に近寄るなんて」
街中では草の多い場所を徹底的に避けている。馬の世話も、飼い葉をやるのは人に任せているら
しい。それでもブラッシングは出来るだけ自分でしているんだとか。

「だって、馬は可愛いだろ。せつかく来たのに見えないなんて、俺には耐えられない」
「まあ、可愛いですが」

ナジカの愛馬が彼を見つけて走り寄ってきた。彼にとつては我が子のように可愛いに違いない。
「そーいやあ、グラーゼのエルファん家は広いのに家畜はいなかったな」

クライトが思い出したように言う。

「ええ、菓草園はそれほど家畜の力を必要としないんです。必要な時は、持っている人が貸してく

れます。葉草魔女は地域の人に特に親切にしてもらえますから」

少し離れたところに行く時は馬を借りたし、畑を耕す時には牛を借りた。

「あー、さすがに辛くなってきた」

ナジカがごぼごぼと咳き込みながら馬から離れた。

「やっぱり……悪くなる前に離れましょう」

皆で苦笑しつつ、ナジカを連れて作業場に向かった。

建物の裏では、収穫したハーブを束ねて干している最中だった。エルファはふと、ミゼルのことを思い出す。

「このハーブ、落ちているものでいいので、ただだけませんか？」

地面に落ちたハーブを指さして、近くにいた女の子に聞いてみた。

「えっと、別にいいけど……何するの？」

「煮出して使っんです。飲むわけじゃないですよ」

「じゃあこれ」

女の子は麻袋あまふくに入っていたハーブを差し出した。

「後で馬の餌えさに混ぜるつもりだったやつ」

「ありがとうございます」

エルファが礼を言うと、彼女は顔を赤くして目を逸らした。どうやら恥はかずかしがり屋らしい。

作業場に入ると、中では従業員達が乾燥させたハーブを選別はかしたり、重さを量はかって混ぜたり袋に

詰めたりと、細かい作業をしていた。

ナジカはまだ入り口の外にいて、髪を梳とき、スカートや衣服を払って花粉を落としている。これをしてないと牧草から離れても辛いらしい。

彼の作業が終わるより前に、カルパが手を叩いた。従業員達がこちらに注目する。

「みんな、ちよっと手を止めてくれ。噂には聞いてると思うが、この娘むすめは新しい料理人で、葉草魔

女のエルファ・ラファ・レーネだ」

カルパの紹介で、エルファは小さく頭を下げた。

「葉草の専門家だから、何か畑や体調のことで困ったら聞きに来い。エルファも色々聞きに行くことがあるだろう。互いに知っていること、知らないことをすり合わせて、この農園をより良くしていきたい」

知らないことを知るの大切だ。きっとエルファが得るものも大きいだろう。

「あっ……」

先ほどハーブの袋をくれた女の子が、何か言いたそうに入り口に立っていた。

「ミリー、なんだ？」

「あ、いや、いい」

彼女は首を横に振って作業を始めた。カルパはエルファを振り返り、意味ありげに笑う。

彼女がカルパやミゼルの言っていた、相談事のある女の子だろうか。しかし彼女とは初対面だし、先ほどの態度を見る限り、人見知りのようだった。なかなか相談しにくいなら、同性のミゼルも一

緒に聞いてもらった方がいいかもしれない。

カルパは前に向き直ると、何食わぬ顔で言う。

「そっか。じゃあ、作業が終わったらエルファが作った菓子があるから、楽しみに」

彼らは顔を見合わせるだけで、あまり喜んでいるように見えなかった。ナジカの喜び方が大仰おごもようだからそう見えるだけかもしれないが。

「ここにいるのは、だいたいあんまり人付き合いが得意じゃない奴らだから、反応が鈍にぶくても気にしないでくれ。しつこく話しかけたりすると嫌がられるけど、仕事のことならちゃんと答えるし、美味しい物だって嫌いじゃない。これでも喜んでるんだ」

クライトの説明で、エルファは彼らを少し理解できた。恥ずかしがり屋は先ほどの少女だけではないようだ。

人に話しかけられるのを嫌がる人というのは少なくない。だからこそ店で接客するよりも、この農園いちどに集って働くことにしたのだろう。最低限の会話でも許してくれる人達ばかりなら、気が楽だろうから。

その後カルパから、ここで加工されたハーブティーが、どのように、どこに送られるかなどの説明を受けた。

ここからそのまま出荷するのは、小売店などに広く卸おろす大衆向けだそう。そして一部は一旦、都のカルパの部屋に運ばれ、カルパの魔力に触れさせるらしい。商品の中では一番高額で、ある程

度付き合いのある富裕層向けだ。

さらに保管庫を見せてもらった。

「茶葉はないんですね。ここでブレンドしていると聞いていましたが」

この作業場では、農園で取れたハーブをハーブティーに加工する他、各地から取り寄せた茶葉をブレンドしたりもしているらしい。紅茶というのは、どんな季節でも商品の味を一定に保つため、配合を変えてブレンドするのが普通なのだ。

「茶葉は別の倉庫に移動させたんだ。ここは主にこの農園で穫れた作物で埋まっていくからさ。一年分の収穫物だから、けっこうな量になる」

農園はすいぶん広かったので、エルファは納得する。

「ハーブだけでもかなりの収穫量になるでしょうね。私の故郷でも売られていたようですから」
多くのハーブは、今頃からが最盛期だ。それらを年中提供できるよう、大切に保存するのである。茶葉も含め、全ての収穫物の品質を良好に保たなければならないのだから、従業員達も大変だろう。

「そういえば、エルファが気に入って毎日飲んでいるプラムサワーは、ここで獲れたプラムを使ってミゼルばあさんが漬けたんだ。あれ以外にも色んなシロップがある。主にティールームに出してるんだ」

「色々と作っているんですね」

「色々やらないと飽きられるからな。まあそんな風にしていたら、最初の目標とは違う、流行の酒しよ

落れた店になってたけど」

カルパとしては、本当は落ち着いた雰囲気の店で美味しい物を出し、ゆっくり客と語らったりしたいらしいが、現状は客が並ぶ店、予約でいっぱいのお店である。

倉庫から出ると、さらに別のハーブ畑を案内された。この農園でどんなハーブを作っているのかわかると、料理の提案の幅も広げられる。前もってティールーム用の新しい商品開発の相談を受けていたこともあり、大いに参考にさせてもらった。

その道すがら、畑の隅に見覚えのある花を見つけて、思わず足を止める。浅紫の綺麗な花だ。

「あれ、何の花だったっけ？」

花自体は見たことがあるが、いつ見たのかが思い出せない。

気になって足を止めると、たまたま近くにいたグローグが教えてくれた。

「あの花は知り合いの貴族の坊ちゃんが植えてったんだ。綺麗だろ」

貴族と聞いて、ますます分からなくなる。自分で植物を植えていくとはどんな貴族だろう。

「ああ、リュキエス様か。ルゼ様の兄君だよ。ちよつと変わってて」

カルパが額に手を当てて困ったように言った。ルゼ様とは、実りの聖女に仕える女聖騎士だ。

この大陸の多くの国々には、神秘の力を持つ人間を、聖人として崇める習わしがある。エルファの先祖ラファルタも、植物を操る力を持った実りの聖女で、その名は薬草魔女が名乗る『ラファ』の由来にもなっている。

そのラファルタと同じ力を持った聖女が、数年前ここランネルに現れたというのは、グララゼで

も噂になっていた。その聖女様と、彼女に仕える聖騎士達は、カルパやナジカ達とも親しいらしい。実りの聖女エリネは優しげな美人なのに対して、聖騎士ルゼは強くて格好いといと大層評判なのだが、そんな立派な人物の兄が、わざわざ花を植えていく理由が分からなかった。

「美味いって言ってたから試しに芽を茹でて食べたんだけど、腹壊してさ」

グローグが肩を竦めて言った。

「でも花は綺麗なんで、そのままにしてあるんだ。まあ他の作物と間違えることはないから害はない」

今の説明で思い出した。

「ああ、あれ、芋の花ですよ。ジャガイモの花！」

実家では作っていないが、一度だけ他所の畑で見たのを思い出した。

「芋？」

「だから食べるのは根つこの部分です。茎や葉には毒があります」

カルパ達は顔を引きつらせながら青ざめた。有毒植物の食べ方を説明せずに美味しいと言って植えていくとは、恐ろしいことをする人もいたものだ。

「芋の部分も芽や、緑色になった表面なんかは駄目なんですよ」

「恐ろしい物を植えてってくれたな、あの人」

カルパは頭を掻いてため息をついた。

「リュキエス様のお父上であるエンベール地方の領主様は、フレラメのお得意様で、一番大きな仕

入れ先なんだ」

カルパ達が『ルゼ様』に助けられ、深い付き合いをしているのは知っていたが、商売の面でもそこまで強い繋がりがあったとは思いましなかった。

「だから処分するのもなあ」

「処分なんてもつたいない。ちゃんと調理すれば美味しいですよ」

「でも危険なんだろう？」

「正しく調理すればいいんです。あと連作障害があるので、同じ場所にずっと植えてると育たなくなりませす」

「どんな効能があるんだ？」

「あれは主食です」

エルファが言うと、彼らは顔を見合わせた。

「小麦が育つ場所だとあれを主食にする必要はないし、ちゃんと調理しないと不味いし、毒もあるので広まらないみたいです。だけど高山植物なので、寒くて荒れた場所でも育つという利点があるんです」

「ああ、ライ麦みたいな扱いか」

カルパは芋の花に近づいた。綺麗な花だ。しかし綺麗な花に毒があることは珍しくない。

「これなんてもう収穫できそうですよ。試しに食べてみますか？」

エルファは花の枯れかけた株を指さした。

「そうだな。試食してみるか。次にリュキエス様に会った時、感想聞かれたら困るし」

説明を受けていなかったとはいえ、食べ方を間違えて腹を壊しましたと言いくいだろう。

エルファは株を引っこ抜こうと腕まくりをした。

「ああ、俺がやるよ。服が汚れる」

グリーグが申し出てくれた。

「じゃあ、拳ぐらいの塊かたまりがたくさんあるんで、それを傷つけないよう土を掘ってください」

引っこ抜いた芋を見ると、あまり大きくはなかったが、なんとか食べられそうだ。

「これ、味はどうなんだ？」

カルパが顔をしかめて、ごつごつしたジャガイモを手を取った。

芋は決して見た目の良い作物ではない。毒もあることから、これを別の大陸から持ち込んだ船乗りは、悪魔の植物と言っていたそうだ。だから最初は観賞用にされたという。可食部分が分からなかったり、見た目が悪かったりして人々の口には届かないという食物は、案外多いものらしい。

「ああ、これ、食べたことがある。あんまり味がなかったような」

仕入れ人のクライトは思い出したように手を叩く。

「新しい食材でやりがちな、茹ゆでて塩だけで食べるという方法だと、それほど美味しくありません。なので他に主食がある土地ではあまり好まれず、本当に貧しい土地にしか広まらないんです。ですが脂あぶらと一緒に食べたら、病みつきになります。例えば、お肉と一緒に食べるとか。だから脂あぶらの滴したたるお肉を頻繁に食べるお金持ちが好んで食べていたりするんですよ。庶民の方は、見た目の悪さや味

の淡泊さのせいで食べたがらなかったりするんですが」

「食べてみれば分かりますよ。裕福な方がこれにハマるとブクブク太ります。まるで麻薬のようにヤバイです」

皆の目が妖しく輝いた。皆商人である以前に、かなりの美食家だから。

グリーグはうきうきしながら素手とスコップで残りを掘り出し、前掛けの端を持ち上げてその上に載せた。そして皆でエルファの背を押し、調理場を借りるために屋敷に戻った。

エルファが調理場へ行くと、ちょうどミゼル達が料理を作っているところだった。

ローストするという鶏肉があつたので、これを使わせてもらうことにした。凝ったことはせず、ハーブとニンニクで風味付けし、塩胡椒をまぶして一緒にオーブンに入れる。これなら皆の料理の邪魔をすることもない。

「これで良し。何か他にお手伝いできることはありませんか？」

エルファが尋ねると、ミゼルは大袈裟に手を振った。

「せっかく来てくれたんだ。楽しみに座っておいでよ。大した物は出来ないけど、素材の味はいいからね。下手なことをしなけりゃ美味しいよ」

カルパも近くにあったエプロンを身につけ、袖をまくった。

「もちろん楽しみだよ。だけど手伝わせてほしいんだ」

「私も、勉強させていただけると嬉しいですよ」

「勉強だなんて。嫌だね、あたしなんかの料理を見ても、学べることなんてないでしょうに」

「そんなことはありません。経験豊富な方のお仕事は、すべてが身になります。些細なことでも、遠い国から来た私にとってはとても珍しかったですし。ご迷惑でなければお手伝いさせていただきます」

カルパがその辺にあつたエプロンをエルファに差し出してくる。どうやら共用の物のようだ。

「じゃあ、タマネギを薄切りにしてくれるかい。うちの人が好きでねえ。マリネにするんだよ」

「はい。薄切りは得意なんです。子供の頃から練習していたんですよ。タマネギは滋養強壮や怪我の治療にも使える万能薬なので」

そう言つてエルファもエプロンをつけ、袖をまくった。

クライトは「じゃあ、俺は商品の様子を見てくる」と言つて厨房を出ていく。

エルファ達が作業を始めると、ナジカは厨房の隅に行く。彼はそこで涎を垂らさんばかりに見ているだけだ。手伝えないので仕方ない。そんなナジカをカルパが睨みつけた。

「え、何ですか？」

「いや、ナジカに見られてると、料理が不味くならないか心配になるんだよな」

カルパがわざとらしく顔をしかめてみせると、大人しく座っていた彼が立ち上がった。

「俺の呪いは視線にまで及ばない！ はずす！」

涙目になったナジカが言い返す。彼は世にも珍しい、触れた食べ物を苦くするという能力の持ち

主である。一応その苦み成分は、滋養強壯にいいとのことだが、本人は自分の力を呪いと言って憚らない。

「はずって、うちで一番の舌を持つクライトと一緒に食事をして何も言わないんだから、大丈夫だろ」
自虐的なナジカの言い分を聞いて可哀想に思ったのか、からかったカルバ本人が指摘した。

クライトは隠し味の正体を毎回言い当てるような舌の持ち主である。しかも仕入れ人として常に美味しい物を探し求めている。その彼が気にならないなら、影響はないのだ。

「なるほど！ そりゃそうか！」

ナジカが笑うのを見て、カルバは苦笑した。

「お前って本当にそういうところは単純だな。あと咳するなら口覆え」

カルバに言われて、ナジカは新しいスカーフを取り出した。予備も用意していたらしい。あれをつけるのとどれだけ楽になるのかが窺える。

ナジカは普段はそれなりに思慮深いのだが、食べ物絡むと、途端に駄目になる人だ。そんな人だから、恋をしても一口惚れなどと皆にからかわれる。一緒にネタにされるエルファはたまったものではない。

しかしそのおかげと言ってはなんだが、元婚約者のアロイスを思い出して苦しくなることはあまりなくなった。幼い頃からよく知っている、本当に親しかった彼の裏切りには今も胸が痛む。だからこそ人を裏切ってはいけないのだと分かった。本人は大したことでないと思っても、裏切りは人を傷つける。

「ん、どうした？」

カルパに止まっていた手元を覗き込まれ、エルファは首を横に振った。

「いつもの調子で切っていたら、タマネギが目」

「ああ、そりゃあ料理人の包丁とは違うからな。研ぐか？」

タマネギはよく切れる包丁だと目にしみにくい。

「いえ。大丈夫です。十分手入れはされていますから。それに包丁を水に濡らすと、多少マシになります」

エルファは笑って誤魔化し、包丁を濡らしてまたタマネギを切った。

「さすが、手慣れたるなあ」

ナジカがエルファの包丁捌きを見ながら言った。

「ゼノンさんの方がすごいですよ。正確無比な包丁捌きです」

「あいつは傀儡術で身体を動かしてるんだ。普通に切ったらもつと遅いよ」

「そうなんですか」

「平和的な力の使い方だっただけ」

「確かに、とても素晴らしい使い方ですね」

傀儡術は使い手が少なく、またイメージも良くないので、物語では悪役に宛てがわれるような力だ。が、料理に使えば、皆を幸せに出来る力に早変わりだ。暴力を嫌うゼノンらしい発想だった。

「ナジカくん、暇だったら馬のところに行ってきたら？」

事情を知らないミゼルが提案した。見れば、今度は腕を掻いている。

「うーん。外は辛くて」

「ひよっとして、風邪でも引いたの？」

「風邪じゃないんですけど、似たようなものです。冬になれば大丈夫みたいだけど……」

彼は切なげに視線を逸らして、新しいスカーフの下でごほりと咳をする。

「枯草熱なんて、牧草とかが生える場所が駄目なんですよ。室内が安息の地らしいです。そっとしてやって下さい。この調理場なら庭も綺麗に手入れしてあるから、扉を開け閉めしても大丈夫みたいなんです」

カルパがミゼルに謝罪しながら手を合わせた。

「へえ。大変だねえ。あんなに馬が好きなのに。普段はどうしてるの？」

ミゼルは同情の目を向けた。

「牧草に触れる作業だけ人に代わってもらって、他の世話はちゃんとしていますよ」

「それはよかったわね。あなたが馬に触れられなかったら、うちの人も悲しむところよ。うちの人

はナジカがお気に入りだよ」

並べられた夕食を前に、ミゼルが豊穡の女神レルカへと感謝を捧げる。従業員達も、指を組んで日々の糧が与えられることに感謝する。この国には実りの聖女がいることもあり、農場で働く彼ら

の祈りは真剣だった。

農場の朝は早く、だから朝食も夕食も時間が早い。ラフアでは今から仕事というこの時間に夕食を食べるのは、故郷の薬草園を離れて以来のことだった。

祈りが終わるとワインが配られる。エルファ達は明日、日の出前に出発するから、飲むのはほとんどしななければならない。

「タマネギのマリネ大好き」

ナジカは先ほどエルファが切ったタマネギに興味を示した。

ここでは大皿料理を皆で取り分けて食べるため、それぞれが好きな料理に手を伸ばす。食べ物苦くするナジカにはそれが出来ないのです、誰かに頼んで取り分けさせ、口元まで運んでもらわなければならない。今日はエルファがその役目を負った。さすがに目上の人間にさせるわけにはいかない。ちなみにナジカが食事時に傀儡術を使わないのは、彼の魔力が食べ物に触れたら、結局苦くなるからである。

「この辺りのタマネギは、甘くて生食するのに向いていますよね。タマネギのマリネ、以前は好きってほどでもなかったんですけど、この国に来てからは大好きになりました」

「へえ。気候の違いかな」

エルファの言葉に相槌を打ちながら、ナジカはフォークで差し出されたタマネギを食べる。

「品種の違いもあると思います。何にせよタマネギはとっても身体にいいですよ。滋養強壮に良く、虫下しの薬にもなります。防腐効果もあるので、傷に塗って消毒薬代わりにしたりと食べ物

以外としても役に立ちます。火を通すと甘くなつてすごく美味しいですけど、薬効を求めるなら生で食べるべきです。辛味を和らげるために、切った後少し置いておくこともありますが、このタマネギはそのままでもいいので使いやすいですね」

エルファもタマネギを食べた。レモンの風味がよく合っている。

「美味しいだけじゃないだね。俺は美味しけりやそれで十分なのに」

ナジカの発言は冗談ではなく、本当に美味しければ何でもいい人だ。だからこそ、美味しい物を好きなだけ食べたがる傾向がある。それを周囲が咎めて、常識の範囲内に収めてくれているから、彼は引き締まった健康的な体型を保てるのだ。枯草熱のせいで最近では食べ物についても考えるようになったと思つたが、やはり元々の傾向は根深く残っているらしい。

「お、美味い」

カルパが称賛の声を上げる。見れば彼は、ジャガイモを食べていた。

「本当だ。普通に美味しい。そういえばこれ、何年か前にエンベールでリュキエス様が料理して出してきたクソ不味い食べ物じゃないか？ あんまりひどかったから今まで気付かなかつたけど」

「あの吐き気がするほど不味かつた料理か！ なんてあんなことに……」

カルパとクライトが、頷き合いながらジャガイモを食べている。彼らは美味しさよりも、別のことに強い衝撃を受けていた。

「小麦が不作だった時、飢えた庶民に広めるため、この花を積極的に身につけて宣伝した賢い王妃様がいたそうです。料理の添え物として良し、主食としても食べられ、しかも育てやすい。ですが、

連作障害と病害が起こりやすいという弱点もあります」

エルファはナジカにジャガイモを与えながら言った。茹でただけでは味でパンに負けてしまうが、脂を使い、ちゃんと味付けをすれば激変する。

エルファも一口食べる。すると思つた以上に美味しく驚いた。

「このジャガイモ、食味がいいですね」

「そうなの？」

「ええ。私が昔食べた物はもう少しばさついていて味も良くなかったのですが、これは美味しいです」「あんな放つたらかしたような育てられ方したのにな？」

ナジカが不思議そうに問う。

「それだけ育てやすい作物なんです。だけどこの味は……品種改良でもしたんでしょうか」

「あ、リュキエス様はカテロアに留学して農学とかを勉強してきたんだ。だからそうなのかもな」それなのに、クライトが今の今までその正体に気付かないほど壊滅的に料理が下手だと。

「もつたいない人だよな……」

「いい人だし、出来る男なのになあ」

「商才もあつて、いい男なのになあ」

才女であるルゼの兄なら、彼らの言う通り出来る男なのだろう、料理以外は。

「どうして料理人に作らせなかつたのでしょうか？」

「下手に料理人を手配すると、自分のしてる事が周りにバレるからだろ。普通に実家の商売で忙

しい方だから、周りから余計なことをするなと止められてるんだ。ご実家のエンベールは魔物との貿易の拠点でさ。国境になってる大きな森に接してるんだけど、そのあたり一帯が大きな観光地になってるから、本当にお忙しいらしい。だから自分の趣味で何かしたくなかった時は、こっそり動くんだ。前にジャガイモを食わせてくれた時も、家族に内緒で調理してみたんだ」

「エンベールって観光地なんですか？」

ナジカの説明を聞いてエルファは混乱した。魔物がいる地域がなぜ観光地になるのだろうか。

「見た目の怖い魔物はほとんどいなくて、小型の獣族が働いているんだ」

「ああ……」

獣族とは獣の姿をした魔物だ。小型の獣族は、ぬいぐるみのように可愛らしい上に、人間の言葉話して意思疎通できる。そのため愛玩用に欲しがる人間が多いので、滅多に人間の前には姿を現さない。そんな獣族達が働いているなら、観光地にもなるだろう。

「街道も整備されてるから、乗り合い馬車が一日に何便もあつて行きやすい。温泉地もあるし、名産品は花。うちのフレーザー用の花も育てていて、香水の産地。季節によつて色んな花が咲いてる人気の観光地だな。獣族を守るための立派な警備隊もあるから、治安もいいんだ。警備隊を仕切っているのは、ルゼ様の兄弟弟子達で、俺の兄弟みたいな傀儡術師も何人か定住してる」

そんな縁もあつて、リュキエスと会う機会が多いのだそうだ。ナジカは微笑んで続ける。

「いつかまとまった休みが取れたら、連れていってあげようか」

「お前の休みに合わせるまでもなく、そのうち連れていくつもりだが？」

カルパが言うと、ナジカは涙目になった。

「ぜひ、俺も一緒に連れてって下さい」

「お前、本当にエンベールが好きだな」

カルパはワインの入ったマグを片手に、呆れ顔で言う。

「すげえ居心地いいもん。ゼノンやパリルもエンベールが好きだよ」

彼と一緒に育つた傀儡術師——穏やかなゼノンと、少し過激で皮肉屋の少女パリル。性格がまったく違う二人が、同じ場所を好きだというのは意外だった。

「あの二人は、昔エンベールに行ったのが今の仕事を選ぶきっかけになったからだろ。お前はただ食い物が美味いところが好きただけだ」

その会話を聞いて、エルファは噴き出した。

「ナジカさんらしいですね」

彼は、悪評を立てられがちな傀儡術師の地位向上のためにお堅い緑鎖で働いているのだが、稼ぎは好きな物を食べるために使っている。放つとくと全部食べ物に費やすから、彼の上司が睨みを利かせ、毎月蓄財させているそうだ。

「本当にナジカらしいだろう。美味しい名物がないところには絶対についていきたいなんて言わない」

「そんなことはないよ。エルファが行きたいなら、料理の不味いところでも案内する」

ナジカはエルファを見つめて言った。口説かれてる気分にならない、変な口説き方だった。

「ナジカさんは本当に変わった人ですね」

「え、普通だと思っけど」

自覚がある人は、普通の人だ。自覚がない人ほど、普通でない場合が多い。ナジカのそういうところは、エルファも嫌いではない。

「あらあら、ナジカくんみたいな色男をいなすなんて、さすがねえ」

ミゼルがころころと笑いながら、服の上から二の腕を掻いていた。二の腕だけではなく、先ほどから頻繁にどこかを掻いている。ここまで来ると、気のせいではないとエルファも確信できた。

「カルパにもこういうしつかりしたお嫁さんが来てくれたら、あたしも安心できるんだけどねえ」

「見合いでもするか？」

ミゼルだけでなく、寡黙なジョズまでカルパにそう声をかける。

「まだそんな歳じゃないだろ。相手がいないわけじゃないんだ。ただ、邪魔されているだけで！」

カルパの反論に、皆諦めたような視線を彼に向けた。

カルパは顔立ちも整っており、その上、大きな茶間屋ちやどんやの経営者を務める男だ。女性が放つとくはずがない。きつと彼の護衛が身元の不確かな女性を排除したり、女性同士が互いの足を引っ張ったりしているのだろう。エルファには理解できない世界だ。

「まあいい。それよりクライト、次にリュキエス様がいらっしゃったら、こいつの育て方を教えてくれるように伝えてくれ。忙しい合間に植えていくぐらいだから、本気なんだろう」

ジョズが肉とジャガイモと一緒に食べながら言う。

「ついでに、正しく調理しなきゃならない食い物を売り込みたいなら、まともに調理できる奴も用意しろ、と言っとけ。うちのもんがまた腹を壊したらたまらねえ」

「それは、よおく言っときます。あんなの出されたら、たまったもんじゃない」

どんなひどい料理だったのか気になるが、食べたいとは思わなかった。だが、世の女性に人気があるルゼの兄なら、きつと素敵な男性だ。お目にかかれる日が、少し待ち遠しかった。

食器を洗い終えてエルファはエプロンで手をふいた。

「片付けまで手伝ってくれて、ありがとうねえ」

ミゼルは礼を言うのと、背中に手を回して掻いた。

「いいえ。私もハーブを使わせてもらいましたし」

そう言ってエルファは水で冷やしているケトルを持ち上げた。先ほど作業場の裏でもらったハーブ——ローズマリーなどを煮出した物だ。

「ミゼルさんはいかがですか？」

「冷やしたのを飲むのかい？」

「いいえ。肌につけてお手入れするんです」

桶に移し替えて指先で触れ、ぬるくなっていることを確かめた。

ここにいるのはミゼルと、エルファに何か相談したがっていた恥ずかしがり屋の女の子だ。ちょうどいい。ミゼルのことをきっかけに、この女の子の話も聞けるかもしれない。

「あたしなんて今さらお手入れしてもねえ。あたしより、ミリーはどうだい」

そう勧められた女の子——ミリーは、慌てた様子で振り返り、^{すぶ}継るような目でエルファを見て首を横に振った。その反応を見て引つかかりを覚えたエルファは、話を続ける。

「そんなことおっしゃらずに、ミゼルさんも。お身体がかゆいようですが、保湿すると良くなるんですよ。良いクリームも持ってきてるんです。この前、クライトさんがこちらでいただいた蜜蝋^{みつろう}から作った物ですが、ぜひ試して下さい」

エルファが再度勧めると、ミリーはその横で何度も頷いた。

「でも、ミリーだって何か相談したがってたじゃないか」

「あ、あたしはもう解決したの。だけどたまにかゆくなったりするから、ばあちゃんが掻^かいてると気になるんだ。ばあちゃん、やってもらいなよ」

彼女はちらつとエルファを見た。その様子にエルファはこれが正解だと察して笑う。

どうやら彼女は、最初からミゼルの症状について相談したかったようだ。初対面のエルファが気になったのだから、ずっと一緒にいる人が気になるのも当然だ。

「そうですね。人はかゆみぐらいだと大したことじゃないと思って我慢がちですが、掻^かいてしまつと肌が傷つくので良くありません。原因は乾燥だと思いますが、若い方でも乾燥が原因でかゆくなることは多いんですよ。私もおばあちゃんに塗ってもらいました」

エルファがそう説明すると、ミリーはまた何度も頷きながら言う。

「ああ、あたしが塗^ぬったげるよ。だからあたしがかゆい時はばあちゃんが塗^ぬっておくれよ」

ミリーがミゼルを慕っていることが伝わってきた。ミゼルも、ミリーが何を相談したかったのか察したらしく、愛情のこもった目で彼女を見てからエルファに向き直る。

「エルファさん、気を使^{つか}ってもらって悪いねえ」

「いいえ。ミゼルさんは私のおばあちゃんになんとなく似てて、つい手伝^{てん}いたくなつちゃうんです。ホームシックでしょうか？」

嘘ではない。エルファはどうにも老婦人に弱いのだ。曾祖母^{そうそぼ}に対しても、今ごろ新しい弟子にいいところを見せようとして腰を痛めたりしていないかとか、くだらないことを心配してしまふ。

「あー、わかる。ばあちゃんは、何かいかにもおばあちゃんって感じだよ」

「ババアなんだから、ババアっぽいのは仕方ないでしょう」

二人の掛け合いを聞きながら、エルファは鞆^{かばん}の中からガーゼを取り出して、煮出したハーブ水につけた。

「クリームだけでも十分ですが、このハーブ水みたいに肌にいい物をつけてからクリームで蓋^{ふた}をした方が効果が高いんですよ」

軽く絞^{しぼ}ったガーゼを、ミゼルが掻^かきむしっていた腕に載せた。

「ローズマリーは美肌のハーブです。カモミールもかゆみにいいので、煮出してお風呂に入れると効果的ですよ。年齢問わずお薦めです」

手で押さえて肌にハーブ水を浸透させてから、ガーゼを剥^はがし、クリームを塗^ぬる。

「クリームでもいいですし、品質の良い油を塗^ぬるだけでもいいんです。こうやって保湿すると、一

番手つ取り早くかゆみが取れます。もちろん乾燥以外のかゆみだと効果は期待できませんが」
ついでに手の方にもクリームをすり込んで、もみほぐす。

「お上手ねえ」

「毎日の家事で疲れている手は、たまにはこうして労^{いたわ}つてあげないといけません」
すると、ミリーがミゼルのもう片方の手を取って尋ねてくる。

「このクリーム、簡単に作れる？」

「ええ。私達薬草魔女は、症状に合わせて身近な物で薬を作るんです。このクリームは、油以外はこここの農園にある物だけで作ったんですよ。後で作り方を教えましょうか。お顔にも塗れますし。乾燥する冬には、かかとや肘なんかのカサカサする場所に塗ります。作り方を知っていると便利ですよ。材料を変えて季節ごとに色んな悩みに合った物を作ること出来ます。女性には悩みが多いですからね」

「う、うん」

彼女はぎこちなく笑って言う。

「おねえさん、さすがクライトさんが連れてきただけあるね。すごくよく見てる。ありがとう」
役に立てたようで何よりだ。今日のこと、ミリーも少しはエルファに慣れてくれただろう。

まだ気軽に相談してもらえるとというほどではないが、他の従業員達にもこれぐらい慣れてもらうのが当面の目標だ。

彼女達との付き合いは、きつとエルファにとっても実のあるものになるだろうから。

第二話 王室へ

オーブンを開くと、焼き立てのパンと、練り込んだハーブの香りがふわっと厨房^{ちゅうぼう}に広がる。表面にうつすらと焦げ目の付いたバゲットは、見た目からしていかにも美味しそうだ。

「はあ、今日もいい焼け具合ねえ」

匂いにつられてやってきた給仕のニケが、オーブンを覗き込んだ。

今焼き上がったのは、レストラン・ラファアで出す高級なパンだ。ティールーム・フレームで使う物とは素材からして違い、水にもこだわりがある。この周辺で湧くのは軟水だが、バゲットを焼くには硬水が向いている。そのためわざわざ美味しいと評判の硬水を取り寄せたのだ。

水によって料理の味はかなり変わる。フレームの主力商品であるお茶を淹^いれる時は、この周辺の癖^{くせ}がない軟水が向いている。

練り込んでいるハーブは、先週案内してもらったフレームの農場から今朝届いたばかりの物だ。

一緒に、ミゼルのかゆみが落ち着いたことへのお礼を述べるミリーの手紙もついていた。

「焼き立て。いいわよねえ」

ニケがすすすんと鼻を鳴らして、給仕仲間の後頭部を叩かれる。

「ほらほら、仕事仕事。今日はエノーラさんも商談でいらっしやるんだぞ。手を抜いたりしたら容

赦なく指摘されるからな！」

それを聞いて、エルファも「そうだった」と思い出す。

ゼルバ商会の後継ぎであるエノーラは相手によつて商談場所を変える。今日、この店を選んだということは、大切な商談相手なのかもしれない。何しろここは今や話題の店であり、予約がないと入れない。それでも好きな時に席を確保できるのは、出資者兼恩人の特権だ。

「お客様が誰だろうと手を抜くなよ」

ゼノンが給仕達を睨みつけると、彼らは「はい」と気の抜けた返事をした。客の姿がないと緊張の糸が切れるようだ。しかし、厨房では料理人さえしつかりしていればいい。

「さあて、今夜も頑張りましょう」

エルファは気合いを入れて、焼き立てのバゲットをバスケットに移し替えた。

「失礼いたします」

エルファはノックをしてエノーラが利用している個室に入った。

薬草魔女のレシピを売りに行っている店なので、エルファはよくこうして料理の薬効を説明するために呼びつけられる。エノーラもまた、商談相手を喜ばせるため、必ず商談の席にエルファを呼んだ。エルファとしてもすっかり慣れたものである。

今日もエノーラは美しかった。長い金髪を緩くまとめた、少女のような愛らしさと上品な大人の魅力を併せ持つ、年齢不詳の美女だ。が、それでも二児の母である。彼女の年齢が気になるところ

だが、三十近いカルパよりも上ということぐらいしか分かっていないらしい。

そんな彼女の向かいにいるのは、若い女性だった。どうやら外国人のようだ。そう思ったのは、肌が浅黒かったからだ。銀色の髪をした、いかにも健康的な身体つきの美人である。

エルファは首を傾げそうになった。『身体の弱い人向けに、さっぱりとして消化が良く、滋養のつく食事を』と言われていたのに、客人は身体が弱そうに見えない。健康よりも、美容と瘦身にこそ興味がありそうな雰囲気だった。

「こんにちは、エルファ。今夜も美味しかったわ」

「ありがとうございます。ご要望に沿えるように考えてみたのですが、ああいった料理でよろしかったでしょうか？」

「ええ、柔らかくて美味しいお肉だったわ」

今回は、肉がいいと言われていたので、鴨を用意した。

「お気に召していただけで光栄です。鴨は消化が良く、また美容にも良い食材です」

浅黒い肌の女性は頷きながらエルファの説明を聞いていた。眼鏡が似合う美女で――

(ん?)

エルファは今度こそ、その疑問を顔に出してしまった。

彼女の瞳の色は人間にはほとんど出ない、金色だった。この色は魔物に多いため、人間から忌避される傾向にある。特に彼女のような肌と髪色をしていると、魔族ではないかと疑われてしまう。

魔族とは長い寿命と強い魔力を持つ、人間によく似た魔物で、彼女と同じ、金色の目に浅黒い肌、

銀髪が特徴なのだ。しかし、彼らは滅多に地上に出てこない。恐らく肌の色から察するに、彼女は南方出身なのだろう。

「エルファ、彼女はセク。王室付きの医者よ」

「お医者……様……ですか？」

女性の医者で、しかも王室付きとは珍しい。

「その若さで王室付きなんて、すごいんですね」

エルファは言葉を選んで、しかし素直に賞賛する。

「ええ、彼女は医者の一族出身なの。セク、エルファよ。いい子でしょ」

エノーラはセクに笑みを向けた。

「ええ、そうね。あなた好みの女の子ね」

セクはくすりと笑って、ティーカップをソーサーごと持ち上げた。所作は美しく、品がある。それでも彼女が容姿のことで周りから何か言われていることは、想像に難くない。

ラファーの皆は勝手に商談だと思っていたが、そう言えばエノーラからは『客を連れてくる』としか伝えられていない。セクが医者ということは、エノーラは商談相手ではなく、個人的な友人を連れてきただけなのかもしれない。

「私だけじゃなく、セルマ様にもお気に召していただけるんじゃないかしら」

「そうね。あの方は見ていて和む、毒のないお嬢さんがお好きだから。それにこういう料理も気に入ると思うから、指導してもらえるとありがたいわ。食事に関しては、私はあまり口を挟めないの」

エルファは今度こそ首を傾げた。王室付きの医者が食事に口を挟めない。その意味を図りかねた。

「エルファ、実は薬草魔女のあなたにお願いがあるの」

「どなたか、健康面で悩まれているのでしょうか？」

王室付きの医者なら、それは王族である可能性が高い。セクは深く頷き、伏し目がちに話した。

「正妃のセルマ様は、あまりご健勝とは言えなくて、胃と心臓を患っておられるの」

「胃と心臓……ですか」

今の段階では胃がどう悪いのか分からないが、心臓が悪いのは大変なことだ。

「特に胃痛で食事を受け付けないことが悩みだそうで」

「えっ、胃痛の方が大きな悩みなんですか？」

セクの説明に、エルファは驚いた。しかも『胃腸が悪い』のではなく、『胃痛』と言った。となると、病弱とは別の理由が思い浮かぶ。

「精神的な圧力がすぐに胃に出るお方なの。原因は分かっているんだけど、そればかりはどうしても排除できなくて」

予感が当たり、エルファは悩んだ。高貴な身分の方には、避けようのない役目があるのだろう。

たとえストレスになっても、それが義務であればやらなければならない。

「それで病人食のような物を作らせているのだけど、宮廷料理人というのは無駄に頑固で、どうしてもこうした方が美味しいのだからと自分流の味付けをしたがるのよね。それでセルマ様は口に合わない病人食に辟易していらっしやるの。胃腸にいいフェンネルティーにも飽きてらっしやるよう

「だけど、飲まないと悪化しそうで不安だから渋々飲んでいらつしやるといった具合で」

「セクは困り顔で腕を組んだ。患者の味覚だけは、医者もどうしようもない。」

「胃には……肉なら山羊の肝臓がいいと言われていますが」

「へえ、そうなの？」

「胃や腸が悪い人には山羊です。もちろん本人の体調によっては合わないこともあります……」
説明するものの、頑固な料理人が関わっている以上、食材だけ教えてもどうにもならない。

「私でよろしければご相談に乗ります。料理人の気を悪くしないように、調理法を指導するのも薬草魔女の仕事の一環です。食べるご本人の好みが分からないので、そこから手探りでいくことになりますが」

「ありがたいわ。こういう料理なら、セルマ様もきつとお好みよ。私は料理は食べるのが専門だから、口を挟むとこじれてしまって」

セクは肩を竦めた。エルファは思わずくりと笑う。

「だからこそ薬草魔女という職業が生まれたんです。最初の薬草魔女は、食が細くなった聖女様のために、食べやすく、身体にいい物を各地から取り寄せて研究なさったんです」

「うちにもそこまでしてくれる料理人がいてくれたら良かったんだけど。今の料理人達は腕がいいから、他の王族の方には受けが良くって」

健康な人達にとっては素晴らしい料理を作るのだろう。それも需要の一つだ。

「店が休みの日でもよろしければ、お役に立てると思います」

エルファが快く引き受けると、セクはソーサーを置いた。

「それじゃ次の休みに来られるかしら」

「ダメよ。着ていくドレスを用意する時間がないわ」

エルファは驚いて、反対するエノーラを見た。

「ドレスなら、一着いただいたばかりなんです」

「あれはちよっとした集まりに出る時のために用意したの。セルマ様にエルファを見ていただくんだから、可愛くしないと」

「エノーラ、何も新調しなくても。この服でいいじゃない。カルパだつてセルマ様に招かれる時は制服で来ているのだし」

口論する二人を見比べて、困り果てる。

「あの、私も制服の方がいいと思うのですが」

エルファはセクの意見に同調した。

「ええ……」

「服を用意するのはエノーラの趣味よね？」

不満げなエノーラに、セクが鋭く突っ込んだ。

「エルファ、宮殿に上がるのよ。着飾りたくはないの？」

「でも、お仕事ですよね？」